

様式第8号（第5条関係）

(その1)



令和6年4月30日

十和田市議会議長
石橋義雄 様

会派名 黎明親和会

経理責任者 小山田 剛士

令和5年度政務活動費収支報告について

十和田市議会政務活動費の交付に関する条例第7条第1項の規定に基づき、
別紙のとおり令和5年度政務活動費収支報告書を提出します。

(その2)

令和5年度政務活動費收支報告書

会派名 黎明親和会

1 収 入

政務活動費 1,440,000円

2 支 出

(単位:円)

科 目	金 額	備 考
調査研究費	740,064	茨城県常陸太田市、長野県上田市 (行政視察) 350,944
		沖縄県豊見城市、名護市 (行政視察) 389,120
研修費	120,000	森林・林業・林産業活性化促進十和田市議員連盟 (青森県平内町、青森市) 120,000
広報費	0	
広聴費	0	
要請・陳情活動費	0	
会議費	0	
資料作成費	0	
資料購入費	0	
人件費	0	
事務所費	0	
合 計	860,064	

3 残 額 579,936円

(注) 備考欄には、主たる支出の内訳を記載する。

(その3)

調查研究費

(その3)

政務活動報告書

会派名	黎明親和会			
活動議員名（取扱議員名）				
堰野端 展 雄	櫻 田 百合子	笹 淳 峰 尚		
小山田 剛 士				
区分			合計金額	
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費		4 広聴費
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費	350,944 円
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印		
期間 (年月日)	令和5年10月17日～令和5年10月19日			
支出目的 (支出理由)	令和5年10月18日<茨城県常陸太田市> ・中学生のバス利用無償化の取組について 令和5年10月19日<長野県上田市> ・滞在型市民農園（信州上田クラインガルテン眺望の郷 岩清水）の 取組について			
用務先 (支払先)	茨城県常陸太田市、長野県上田市			
内容及び成果	別紙 観察報告書のとおり			

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

十和田市議会・黎明親和会

小山田 剛 士

茨城県常陸太田市行政視察報告書

日時 令和5年10月18日 午前9時30分～

場所 常陸太田市役所

常陸太田市の市役所を訪問し、常陸太田市における中学生のバス利用無償化の取組について視察研修を実施。

○茨城県常陸太田市の紹介

茨城県常陸太田市は平成16年12月に常陸太田市、金砂郷町、水府村、里美村の4市町村が合併し、ひとつの常陸太田市として誕生。茨城県の最北部に位置し、面積は371.99m²(茨城県で最大)、形としては南北に長く伸びている。

人口46,125人(R5年4月末現在)の都市で、北側に龍神大吊橋がありバンジージャンプが行える観光地となっている。また、そば処として常陸秋そばの故郷として有名。

○中学生のバス利用無償化の取組状況について

十和田市同様、ご多聞に漏れず常陸太田市においても人口減少が著しく、令和5年4月時点では茨城県内において高齢化率が41.2%でトップになるなど、少子高齢化が進んでいる地域であった。そのような地域の公共交通機関は、JR水郡線、乗合タクシー、路線バス(茨城交通株式会社1社のみ)などがあり、平成28年度にコミュニティバスやスクールバスなど各種バス事業を路線バスに統一する公共交通再編を行い、民間路線バスが市民の大きな移動手段となっているとのこと。

これまでバス利用者の増加に向けた取組を実施しているが、人口減少やコロナ禍により利用者が減少するなど路線バスの維持施策が必要な状況になっていた。そこで目をつけたのが中学生であった。

- ・中学生は自転車通学や保護者の送迎など路線バスに乗る機会が少ない。
 - ・バス利用のきっかけづくりにもなり、将来的にバス利用の定着を促す。
→小学生の外出は保護者同伴がメインであることから、中学生のニーズを開拓へ
- この2点の背景より全国初となる取組が令和5年4月よりスタート。

【制度概要】

- ・対象は市内の中学校に通学する市内在住の中学生
- ・申請方式は、紙・WEB両方で受付
- ・配布するフリー定期券は、卒業後は茨城交通のICカード「いばっピ」として引き続き利用可能
- ・令和5年度の事業費は1,034万円（1人当たり11,000円）
- ・対象者は940人
- ・目標利用者数延べ14,400人

【利用状況】

市内の中学生にフリー定期券を配布し、校外学習で路線バスを利用する学校もあつたようだが、9月までの中学生のバス利用率は8.9%にとどまった。昨年度の2.3%と比較すると増加してはいるものの、大幅アップとまではいかなかつたとのこと。アンケートをとると、感謝の声が多い中、バスの乗り方がわからないので利用しない、バスを増便してくれればより利用しますなど、いろんな声が寄せられたとのこと。

【事業のPR方法】

- ・各チラシを配布
4月に中学生フリー定期券のご案内を配布、6月に路線バス地図を配布。
夏休み前の7月にはモデルコースやバスの乗り方を掲載したチラシを配布。
- ・SNS（X 旧ツイッター）を活用
季節に応じ、路線バスで行けるところでポスト（投稿）。
- ・今後の取組として、小中学生を対象としたバスの乗り方教室を企画
開催に向け各学校からの申込を集約中。

【課題と今後の展望】

中学生になってから、いきなりバスに乗ってくださいと言われても中々難しく、中学生の移動手段は保護者の送迎が多いことから進学時のシームレスなバス利用の下地を作りたいと職員の方は話されていた。また、今後の利用状況等により実施の方向性を定めていき、中学生の交通手段の選択肢にバスが加わり、ひいては常陸太田市の公共交通の維持につなげていきたいとのこと。

我が十和田市においても公共交通機関のメインは路線バスになる。市内循環バスでみると利用者数は徐々に増えてはいるものの将来的にもっと利用者を確保する意味で、常陸太田市の取組には利用者を増やすヒントがあったと思った。そもそもバスに乗る機会がない、もしくは習慣がないまま社会人になっている人が多いのではないか。例えば小学生のころ

から路線バスを利用する機会を教育の中に取り込んでいくことも将来的にバス利用者数の増加につながる方法のひとつになるのではないかと考える。常陸太田市の取組を参考に検討する価値はあると思った。

○堰野端 展雄 所感

本年4月からの取り組みということで、試行錯誤の段階であり、実績を見ても極端な課題はみられないものの、中学生、ひいては小学生をも本事業に巻き込んでいこうとの姿勢は見習うべきものがあった。また、バス会社が1社であったことも事業を進めやすかった一つと思われる。十和田市においても、マイカーが当たり前で不便なバスをわざわざ利用する人は現実少ない。しかし、高齢化による事故増加やエネルギーの高騰、SDGsの観点からみても、公共交通の利用は今後、何としても増やしていくかなければならない。利用増加によって、利便性向上が図られるという仕組みを構築し、広く市民に周知されていけば、様々な問題解決につながるのではないかと考える。大変参考になった研修であった。

○櫻田 百合子 所感

当市と同規模の人口である常陸太田市は、人口減少、コロナによりさらに路線バス利用者が減少傾向にあり、今後の路線バスの維持施策が必要であることから、様々な事業が進められている。

高齢者バス料金半額助成、通学用バス定期券助成、運転免許返納者への路線バスICカード交付、バスツアーや等が行われているが、視察項目となった中学生バス無償化は全国初の取組である。将来的な路線バス利用のきっかけづくりとなる、中学生バス利用無償化に視点を向けたことは当市も取り組む価値があると感じた。塾の帰りなど送迎できない保護者からは喜ばれているようで、将来を見据えればバス利用の定着につながるはずだと思う。

○ 笹渕 峰尚 所感

中学生のバス利用無償化の取組は令和5年4月に開始され全国初の取り組みとしてメディアでも取り上げられ全国的にも注目を集めていた。

民間路線バス会社と官民連携で事業を実施することでバスを利用したことのない中学生に利用する機会を与え、バス利用を促進し将来的な利用率を高める目的がある。しかし、現状の利用率はそれほど多くはなかった。数年継続できれば良い方向に向くのではないかと期待が持てた。試行錯誤しながら公共交通の維持に繋げようとする官民の思いを感じた。今後、技術革新などにより時代の変化はより早く公共交通のあり方も大きく変化するかも

しない。しかし、その流れに柔軟に対応し乗り越えて行かなくてはならない。課題はたくさんあるように感じた。

少子高齢化の人口減少社会において公共交通の将来的なあり方は定かではない。十和田市の路線バスも利用者数は減る事が予想される。当市においても将来を見越した取組が必要であると感じた。

十和田市議会・黎明親和会

小山田 剛士

長野県上田市行政視察報告書

日時 令和5年10月19日 午前9時30分～

場所 信州上田クラインガルテン眺望の郷 岩清水 交流棟

上田市の信州上田クラインガルテン眺望の郷 岩清水 交流棟を訪問し、上田市における信州上田クラインガルテン眺望の郷 岩清水の取組について視察研修を実施。

○長野県上田市の紹介

長野県上田市は平成18年3月に上田市、丸子町、真田町、武石村の4市町村が合併し、現在の上田市として誕生。人口は152,986人、面積は552.04m²で長野県東部の中核都市になっている。

戦国武将真田信繁（幸村）でも有名な上田城跡があり歴史的文化遺産など豊富な観光資源を有している。また、山に囲まれた地形で、平地では水稻、果樹、花きなどが、高冷地ではレタスなどの野菜が生産されており、4つの地域で野菜や花きの産地化・ブランド化を推進している。

○信州上田クラインガルテン眺望の郷 岩清水の取組状況について

《開園までの経過》

平成19年頃、この地域にごみ処理場が建設されることに反対した地域住民たちを中心となり、反対だけではなくこの地域のために何か取り組もうという住民たちの想いから、中山間地域総合整備事業実行委員会を立上げ、平成22年度に事業メニューの一つであつたクラインガルテンの整備を要望し翌年度採択されたことがはじまりとのこと。

平成30年に開発行為許可を得て、令和元年度から県が造成工事を行い、令和2年度から市が市債による建築工事に着手し令和3年3月15日に完成、同年4月1日に開園した新しい施設である。総工費は4億円で、県が1億4千万円、市が2億6千万円の負担だったが、合併特例債を活用したため実質持ち出しは1億円とのこと。

《クラインガルテンとは》

- ・ドイツ語で小さな庭を意味する
- ・滞在ができる宿泊施設を備え一定の継続性を持った農作業を通じて農村地域の自然や文化及び人々との交流を楽しむことが出来る取組のこと。
- ・都市と農村それぞれが持つ短所と長所を互いの交流により補完し、発展させることを目的としている。

(都市部の長所・短所)

- ・長所 所得水準が高い、交通の利便性がよい、商業施設が充実など。
- ・短所 自然がない、物価が高い、住環境が悪い、人間関係が希薄など。

(農村の長所・短所)

- ・長所 自然が豊か、物価が安い、住環境の良さ、人間関係が濃密など。
- ・短所 交通の利便性が悪い、人口減少による農地の担い手不足など。

●上記のそれぞれの長所・短所がクラインガルテンの設置により互いに補完し発展させることができる。

- ・所得水準が高い都市住民がクラインガルテンの宿泊施設を借りて、滞在中に食事や買い物をすることで、農村地域にお金が落ちる。
- ・担い手不足により農地の保全が困難な農村住民に替わり都市住民が楽しみながら畑の耕作をすることで農地を保全できる。
- ・都市住民は都会の喧騒を離れ自然環境と家庭菜園を満喫。また田舎ならではの温かな人間関係に触れることができる。

《上田市のクラインガルテンの特徴》

- ・標高 800mを超える中山間地に位置し、眼下には市街地が見渡せ、北アルプスの景色や夕焼けなどの眺望がすばらしい。
- ・特色ある施設とするため、冬場の利用率を高めるよう、燃料としての薪の販売による知己活性化のための薪ストーブを設置。
- ・インターから近く、練馬インターから約 2 時間 7 分の距離でアクセスが良い。
- ・徒歩圏内に日本の棚田百選である稻倉の棚田、車で 10 分圏内に市民の森公園、菅平高原でのスキーなど周辺には楽しめる場が多数ある。また、上田城跡をはじめ文化遺産や温泉も多数あり、利用者の多くは毎週のように市内や周辺市町村での観光を楽しんでおり、経済波及効果が生まれている。
- ・農作業指導が手厚く、地元住民との交流が盛んである。
- ・クラインガルテンは移住促進と相性がいい。

一般社団法人移住・交流推進機構によると、

移住したい理由 1 位は「魅力的な自然環境」→ クラインガルテンなら田舎の自然を満喫できる。

移住への不安 2 位は「田舎の人間関係」→ クラインガルテンで 1 年を通じて地元住民と交流ができるため本格移住の前に人間関係が築ける。

《利用状況》

- ・今までの稼働率 令和3年度で756回（月平均7回）
令和4年度は848回（月平均9.9回）
令和5年度は年度途中だが9棟すべて利用者がいる状況。
- ・利用料 年間1棟56万円×9棟=504万円。
※指定管理料350万円、修繕費で10万円。残額を基金に積立中。
- ・利用者 平均年齢58歳で東京都、埼玉県と主に首都圏からの利用が多い。
- ・利用するきっかけ 移住体験がしたい、子どもに農業体験させたいという理由が多い。

まだ、移住定住につながってはいないものの、物件探しをしている利用者もいるという
ことで今後定住につながる期待が持たれている。

手軽に農作業を経験してみたいなど首都圏在住者のニーズに応えているということが、
開園以来空室がでてないことからも伺える。なにより地元住民との交流が図れることが重
要で、《上田市のクラインガルテンの特徴》でも述べたが、田舎へ移住した後の人間関係
がすでにできていることでスムーズに地元に馴染むことが出来る仕組みがそこにはある。
移住定住施策を推進していく上で、重要な取り組みの一つであると感じた。十和田市にお
いても雄大な自然に恵まれた環境は上田市と同様であり、さらに災害が少ない地域でもあ
ることから老後の移住先としては魅力的な地域でもある。首都圏からの距離が上田市より
も遠いことがデメリットではあるが、仙台市など都市部在住者を対象として、観光地も近
い別荘感覚で利用されることは考えられるのではないかだろうか。交流人口を増やし、移住
定住につながる施策としてのクラインガルテン設備は十和田市においても検討すべきだと
感じた視察研修であった。



○堰野端 展雄 所感

現在、首都圏を除いた多くの自治体で様々な移住定住施策が推進されている。特に地方において。このクラインガルテンの取り組みは大変興味深いものであった。移住を考える方々にとって最適な施策であろうと思う。十和田市においては、「移住お試し住宅」という施策があるが、期間が10日以内と短く、その間に地域環境や人間性、文化等、理解するのは容易くなく、だからこそ、このクラインガルテンは魅力的であり、多くの利用者がいるのは納得である。

ただし、問題は都市部との距離。上田市は東京圏から車で約2時間という、手軽さも人気の大きな要因である。行きたいときに行けて、さほど疲れを感じない距離感。よって、十和田市で考えるのであれば、「移住お試し住宅」の期間延長と設置場所の検討を進めるのが現時点では的確かと。例えば、設置場所であれば、温泉と自然豊かな焼山地区や農作業が体験のできる農村地区にするなど、様々なバリエーションを提供できることを主張するのも一つでは。その他にも色々と参考となつた有意義な研修であった。

○櫻田 百合子 所感

地元要望として中山間地域総合整備事業としてクラインガルテンの整備が令和3年4月1日より開園され、滞在できる宿泊施設を備え、農作業や地域交流、自然や文化交流が楽しめる場所として提供され、事業は指定管理で行われている。話を聞く中で、何より地元の方の熱量に感心した。

地元住民との交流、移住者した方もあり、豊かな観光資源を活かし、都市部と農村それぞれが持つ長所と短所をお互いの交流に補完し発展させることを目的に始まられた事業が进展している。

当市でも、豊かな観光資源をどのように生かし交流人口、また移住に結び付けるかは、距離の問題もあり難しい点もあるが、当市なりのやり方で考え、選んでもらえるまちとして、先進地の事例を取り込みながら進めて行く必要があると感じた。

○ 笹渕 峰尚 所感

人口の東京一極集中の流れが続く中で人々は仕事とプライベートの両立や充実を求めているのだと感じた。都市部で仕事し、プライベートは開放感がある田舎で自然豊かな中で過ごしたいと思っている人が多いのではないか。また子供達には自らが作った農作物を与えてたり子供と農作物を育てたいなどの親心があるのかもしれない。いずれにしても田舎暮らしを求める需要があるためクラインガルテンは各地で人気が高まっている。上田市にお

いては練馬インターから2時間程度とアクセスの良さもあってか全棟が利用されており空きを待つ状況となっている。十和田市においても田舎暮らしを求める需要に対する供給策を打ち出していく必要があると感じた。クラインガルテンを計画しても良いがアクセスの面では上田市に劣る。しかし、空き家を古民家にするなどできればそれなりの需要はあるのではないかと思う。そのための補助金なりを設けて民間に促しても良いのではないか検討の余地はある。

(その3)

政務活動報告書

会派名	黎明親和会		
活動議員名（取扱議員名）			
堰野端 展 雄	櫻 田 百合子	笹 洸 峰 尚	
小山田 剛 士			
区分			
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印	
期間 (年月日)	令和6年2月6日～令和6年2月8日		
支出目的 (支出理由)	令和6年2月7日<沖縄県豊見城市> ・異動受付支援システムについて ・議会改革、議員間討議について 令和6年2月7日<沖縄県名護市> ・名護市立小中一貫教育校について		
用務先 (支払先)	沖縄県豊見城市、沖縄県名護市		
内容及び成果	別紙 視察報告書のとおり		

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

堰野端 展雄

豊見城市

1, 移動受付支援システムについて

システム構築の財源はコロナ禍だったため、地方創生臨時交付金で全額補助（2486万円）ではあったが、システム利用料（保守費用）が、月額244,200円と少し高額の印象を持った。ただし、システムを完全に使いこなせればそれほど高額ではないし、市民サービスの向上や業務の効率化を考えれば相応の金額であるとのこと。確かにこれから時代には欠かせないシステムであり、当市でも導入の予定であるが、システム担当者の力量が問われるようなので、その辺りを注目しておくべきと考えさせられた。

2, 議会改革、議員間討議について

議会改革に関しては、議員選挙により入れ替わりがあったため、もう一度、議会基本条例を1条ごとに見直していこうというタイミングで我々の視察が入ったようで、まだまだ未熟と謙遜されていたが、見直すということは、それはそれで大切であり、当市議会にもあてはまることだと考えさせられた。

議員間討議については、現在は常任委員会の休憩中に行っているとのことだが、運営には苦労しているとのこと。休憩中なので当然、議事録に載らないし市民にも公開されない状況なので、まだまだ発展途上としていた。

北海道の芽室町では議員間討議の基本ルールを定めているそうで、最後に記載しておく。

- ①事実に基づいて議論をする
- ②自分の意見だけが正しいと思わない
- ③ありとあらゆる角度から検討する
- ④みんなが一致した基準で判断する

なかなか難しいルールと思うが、これらが守られなければ、討議にならないし、公開もできないだろうと改めて考えさせられた。

名護市

1, 小中一貫教育の取組みについて

結論、「小中一貫教育校を開校するなら名護市を見習うべき」

沖縄県では最初の小中一貫校ということで、開校まではかなりの苦労があつたが、その苦労は報われたようだ。

特色は、特認校であり、施設一体型。校長先生は一人、職員室も一つ。前中後期ブロック（1～9年生）制、異年齢集団の交流や1年生から徹底した英語教育。キャリア形成に向けた生徒指導の充実等であるが、一番の苦労は小中それぞれの教師同士の協同の徹底。週1回のブロック会や日常的に情報共有ができるような職員室の座席配置。行事の際も必ずブロック会を開くなど、とにかく顔を突き合わせる機会を多くして、コミュニケーションをとらせることにより協同がスムーズになり、今では先生方の第一希望校になっているとのこと。ここでも苦労が報われている。

成果としては、子どもたちの関わる力がものすごく身についている（異年齢の成果）ことや、不登校の改善、英語の成績向上があげられ、なんといっても特認校であるため、市内の遠い地域からでも通う子どもがいて、年々増加傾向にあるということ。保護者の口コミで広がっているそうで、それだけ評判が良いということであろう。

今回の視察は非常に勉強になった。

《 観察における所感 》

櫻田百合子

豊見城市

(1) 移動受付システムについて

何度もワンストップサービスの話が上がった中で、コロナ交付金のタイミングで始まられた事業。当市も進められている事業を同規模自治体の豊見城市へ視察に行き成果等を聞いたが、年間の移動手続きが令和4年に9,083件あり、トータルで5~10分の短縮が見込まれ、市民の記入時間が減るこの事業は成果を上げている。市民サービスの向上だけでなく業務の効率化につながっている。今後はお悔みコーナーの利用も考えていると説明を受けた。当市も書かない窓口、お悔みコーナーを今年度から行いはじめたので、利点は取り入れるよう提案していきたい。

(2) 議会改革・議員間討論について

議会改革についてもう一度見直して取り組むことが目的で行われた議員間討議。議会改革で行われる上で、議案の熟読し論点を確認する事、論点・争点の委員会、本会議で行われる上で、議案質疑の論点整理など時間をかけ丁寧な議会・委員会運営となる。質の高い議会を目指すためには当市も取り入れるべきだと思った。

名護市 小中一貫教育校について

名護市において児童生徒は減少傾向にあり、小学校6校で68人の児童が複式学級で授業を余儀なくされている。複式学級の教育条件は学校教育を推進していく上で様々な問題を抱えている。これらを含め地域によって教育の格差、学ぶ環境の格差をなくすためにも、沖縄県初となる小中一貫教育校「緑風学園」が開校された。気になったのは、小学校を中学校敷地内に移した環境や再び複式学級徒の受け入れを行っていること。

また、4.3.2の教育課程で異年齢の交流、特色ある英語教育、地域の方の積極的な関わりなどに加え、何より現場の先生方の教育に対する熱量のふれることが出来、とても良い観察となった。

十和田市議会・黎明親和会

笹渕 峰尚

豊見城市行政視察報告書

日時 令和6年2月7日（水） 午前9時30分～

場所 豊見城市役所

●□ 視察研修事項

- ① 豊見城市的異動受付支援システムについて。
- ② 議会改革、議員間討議について。

○沖縄県豊見城市的紹介

沖縄県豊見城市は沖縄県の県庁所在地でもある那覇市の南に隣接しており、ベッドタウンとして人口が増加している。2002年に島尻郡豊見城村から市制を施行し視察時の人口は65,243人であった。単独で村が市となった初めての自治体である。市職員の事務作業の効率化や議会のあり方を問い合わせ直しデジタル化や議会改革に取組んでいる。

① 豊見城市的異動受付支援システムについて。

概要：住民が市役所の窓口において手書きで行っていた、住民異動届けに関する手続きをデジタル化することにより申請書記入の負担軽減による住民の満足度向上につながるとともに、市職員による手書き文字の判読や、記入漏れ・書き間違いに伴う補記・修正にかかる手間を軽減することが出来るため住民サービスの向上や職員の負担軽減につながるシステム。

・所感：タブレット上にタッチペンで一度記入するだけなので市民や市職員の手間が省けることは間違いない。ペーパレスなどトータルコストの削減にも繋がることからメリットは大きいと思う。当市でも令和6年度から導入が予定されているため導入後に使用された方の感想や意見を聞きながら取組を進めるべきであると感じた。

② 議会改革、議員間討議について

概要：豊見城市議会基本条例では、自由闊達な討議を通して論点や争点を明らかにし、公開する事が議会の第一の使命であるとされている。議会は、住民自治の基盤として、地域の民主的な合意形成を進め、民意を集約して団体意思を決定する重要な役割を担っていることから議員交際間の議論を尊重し、公正、公平かつ効率的な

議会運営に努めなる必要があることから討議が行われている。

- ・所感：当市では討議は行われていないが地域住民の声を市政に反映させるため討議があつても良い。しかし、各コミュニティーや団体などそれぞれの意見を集約することは難しく無駄に時間を要する場合もある。その他にも検討すべき点はありメリットとデメリットを見極める必要があると思った。

名護市行政視察報告書

日時 令和6年2月6日（水） 午前13時30分～

● 視察研修事項

- ・名護市小中一貫教育の取組について

○沖縄県名護市の紹介

名護市は、昭和45年8月1日、名護町、屋部村、羽地村、屋我地村、久志村の5町村が合併し、県下9番目の市として市制を施行し、令和2年8月に50周年を迎えた。合併の中心となった名護町は、600年の歴史を持つ古い町で名護城（なんぐすく）をその発祥の地として、名護間切りとして古くから北部の中心であった。合併に伴い、広域行政の確立と行財政の強化が図られ、現在では6万人余りの都市に成長した。

・名護市小中一貫教育の概要

「緑風学園」と「屋我地ひるぎ学園」の2校ありどちらも小学校と中学校が一体となった施設、学校運営の中で、義務教育の9年間を一体として捉え直し、一貫した学習指導や生徒指導、発達段階に応じたきめ細かい指導などの教育内容・方法により、児童生徒の確かな学力、豊かな心、健やかな体などの「生きる力」を育む場を目標としている。9年間を見通した系統的・継続的な教育課程の編成を行い、特色ある教育活動の展開を行い、児童生徒の異年齢集団での交流や体験学習を通し、互いの個性を尊重しつつ豊な人間性や社会性の育成や小中一貫した制度指導の推進、学校・保護者・地域が連携した特色ある学校づくりの推進が図られている。

所感：児童生徒にかくあってほしいと念願する子供像を焦点化したものを、学校教育の目

標として設定しており「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、より良い社会を創るという目標を学校と社会が共有し、子供達に必要な資質・能力が何かを明らかにするとともに、あらゆる教育活動において教師が指導性を発揮し児童生徒、保護者、地域と連携・協働して、その達成の具現化に向けて取り組まれていた。具体的には保護者に対し教育目標や理念を理解し賛同、協力することが入学・転入の条件となっている。上級生が下級生に教えたり世話をしたり子供達の自主性を育むため先生が見守る姿勢を大事すると言っていた。当市においても時代の変化に対応した社会を創る教育を考えていくべきだと思った。

◎豊見城市 異動受付支援システムについて

○小山田 剛士 所感

実際に、受付システムを体験したが、タッチペンで液晶タブレット上に一度記入するだけで複数の書類に転記され、書類が完成した。何度も記入しなくても済むことで間違いなく市民の負担が減ることが確認できた。また、作業時間についても、例えば、転入転出の申請の際も一度のサインで済み、職員の事務作業が増えるものの書類を引き渡すまでの時間が短縮されていた。このことから様々な申請書、届出書が全て対応できるとかなりの事務作業の効率はあがるものと推察されるが、あとはコストパフォーマンスの問題で、年間14,652,000円のシステム利用料が短縮できる作業時間や市民の利便性を比較衡量する必要があるが検討すべき取組だと感じた。

◎豊見城市 議員間討議について

○小山田 剛士 所感

議会改革として、議員間討議は注目される取組の一つであり、ぜひ進めていきたいものではあるが、豊見城市においても取組んではいるものの試行段階とのことで、難しい現状があるようだった。議員間において議論し理解を深めることは大変重要ではあるが、さもすれば自己の意見の主張合戦となり、お互いの理解を深めるどころではなくなる可能性もある。そういう難しさもあることから、豊見城市のような試行段階ではあるが、しっかりとルールや、議長や委員長の役割的重要性など、進めていく上で確認すべき事項がまだあることが分かった視察であった。

◎名護市 小中一貫教育の取組について

○小山田 剛士 所感

学校の統合の必要性から複式学級の課題を解決すべく取り組んだ小中一貫教育であるが、通常の6・3制によらない1年生から9年生という4・3・2制のカリキュラムの区分は、受け持つ先生方にとっては初めてのことであり、また、指導方針が異なる小学校の先生は、中学校の先生方が一緒に取組む学年においては、軋轢が生まれるなど困難なことが多かったが、校長先生の強いリーダーシップのもと先生同士のコミュニケーションを図りながら、今のように赴任希望が多い学校に至っているという話を伺い、この地域の子ども達にとって小中一貫校は必要だという強い信念のもと取組まれた結果なのだと実感した。当市においても児童生徒数が減っている状況は同様で、小中一貫教育の在り方について、考えさせられる視察研修であった。

余談だが、名護市では「弁当の日」のことを「HAPPYランチ」と呼び、H20年頃から取り組んでいるとのこと。この取組は教育計画に記載されており、名護市の中学校において、もはや当たり前のイベントとなっている。近々、「HAPPYランチ」は定着した取組であることから教育計画からなくなることも付け加えておく。

研修費

(その3)

政務活動報告書

会派名	黎明親和会		
活動議員名（取扱議員名）			
堰野端 展 雄	櫻 田 百合子	笹 淳 峰 尚	
小山田 剛 士			
区分			
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印	
期間 (年月日)	令和5年8月9日～令和5年8月10日		
支出目的 (支出理由)	森林・林業・林産業活性化促進十和田市議員連盟 令和5年8月9日<青森県平内町 青森県産業技術センター林業研究所> ・施設概要について ・主な研究成果について（スギ花粉症対策品種開発、森づくりの低コスト化技術など） 令和5年8月9日<青森県青森市 森林博物館> ・施設見学		
用務先 (支払先)	青森県平内町 青森県産業技術センター林業研究所、 青森県青森市 森林博物館		
内容及び成果	別紙 視察報告書のとおり		

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

森林・林業・林産業活性化促進十和田市議会議員連盟調査視察

視察報告書

◎所感

今回の視察は、近年議員の顔ぶれがだいぶ変わったことを鑑み、先進地というよりも県内における林業・林産業の状況を知ることを目的に視察内容と工程を検討し実施した。

初めに平内町にある青森県産業技術センター林業研究所を視察。研究所での主な研究成果の説明を受けた。

- ・抵抗性クロマツによるマツ材線虫病対策
- ・スギ花粉症対策品種の開発
- ・ナラ枯れ被害の拡大防止
- ・森づくりの低コスト化技術
- ・公共建築物への県産材利用の促進
- ・県内の気候に適したアラゲキクラゲ新品種の開発

等、重機や機械、現物などを見ながら現状や成果がよく理解できた。

一番の関心はやはり無花粉スギ。現在は無花粉スギによる採取園、採穂円を整備し、今後は種子、穂木を生産していくことで、花粉症患者にとっては朗報であり、主要県産材であるスギが伐期を迎えていることを考えれば、一日も早い無花粉スギの普及が望まれるところである。

次に、施設見学として青森市森林博物館を見学。郷土・青森を軸に、緑の大切さや森林と人間の結びつきをテーマとして、子どもからお年寄りまでが、楽しみながら学習できるように工夫をこらした博物館で、昭和57年（1982）に開館したとのこと。主に県産ヒバ材を使用した、外観の美しいルネッサンス式木造建築物で、青森市の指定有形文化財になっている。六つの展示室があり、特に映画「八甲田山」のロケにも使われた、明治の雰囲気を残す旧営林局長室は重厚であり、一見の価値ありであった。

翌日は「十和田湖を世界遺産に！」と活動している市民がいることから、改めて白神山地を見学。今回は道路事情もあったが、なかなか行く機会がないであろう深浦町の十二湖・青池を見学。炎天ではあったが外国人観光客の姿も見られる等、最近は入山者が減少気味と聞くが、やはり「世界遺産」というネームバリューワードは流石である。

帰途中、北金ヶ沢の大イチョウを見学、当市にも推定樹齢約1100年、イチョウの巨木としては日本で4番目の大きさの「法量のイチョウ」があることから、日本一と言われる「北金ヶ沢の大イチョウ」を見学。樹齢は1000年以上と言われているが、確かに法量のイチョウよりは大きいと感じた。ここまでくると、神々しさを感じるのは私だけではないと思われた。

堰野端展雄

◎所感

本県には、全国有数の面積を誇るスギをはじめ、青森ヒバや県南地域のアカマツなど豊かな森林が広がっている。この豊かな森林の恵を効果的に活用するため、植林から下刈り、間伐など膨大な人手と時間がかけられ、資源の循環サイクルが確立されている。

センターでは、林業用優良林木の育種・増産技術、カラマツ人工林の施業技術、森林病害対策技術、製材技術と高付加価値製品、売れる新品種きのこ育種と高付加価値栽培技術など、それぞれについてセンター独自の課題として捉え試験・研究開発が行われている。ドローンを使った森林調査、青森きくらげ普及事業、研修棟においては林業中核的担い手となる現場技術者の育成も実習地の提供や講師派遣などで協力しており、試験研究開発以外の業務にも力がそがれている。

低コスト化技術の開発とともに、若手技術者の育成に力をいれて頂きたいと感じた。

櫻田百合子

◎所感

国民の約4割がスギ花粉症を発症していると言われる昨今において2023年のスギ・ヒノキの飛散花粉数は対前年比の1.7倍と過去10年平均の1.5倍とな

り、花粉別ではスギが2.2倍と多く飛散している状況を踏まえると無花粉スギを植栽し有花粉スギの伐採を行うことが健全だと思う。2032年度までに花粉の少ないスギを7割に増やす目標を掲げている。しかし、日本中のスギを植え替えるだけの品種改良や種苗生産にはかなりの時間を要する。

林業の成り手不足も懸念される。

そのため令和3年4月に開講した「青い森林業アカデミー」における地域林業の中核的担い手となる現場技術者を育成し、木材の資源サイクルを有効化し本県における林業の発展に期待したい。

笹渕峰尚

◎所感

現在は落着いているものの、ウッドショックにより国産木材の需要が急激に増えたことがあったが、改めて安定した木材の供給のためにも国産材の重要性は高まっている。その中で青森県が行っている林業への取組は興味深いものが多かった。例えば、スギ花粉症対策品種である無花粉スギの開発であるが、全国的に進められているものの日本でスギ花粉症を患っている方はおよそ人口の4割に達しているそうで、早く全国に広まってほしいものであるが交配により成長スピードや花粉の量など丁度良いバランスのスギを開発したこと。植替えなど時間はかなりかかると考えるが、ぜひ進めていただきたい取組だと感じ

た。また、森づくりの低コスト化への取組だが、低密度植栽やコンテナ苗の植栽により作業を低コスト化できる「低コスト化森林施業モデル」を作成し普及しているとのこと。青尾理研の林業従事者が不足していることを問題として取り上げられていたが、低コスト化によって利益率が上がる業種であることが広まれば林業を目指す若者が増えるのではないかと感じた。今回の視察研修で青森県が誇る技術を知ることができ大変有意義であった。

小山田剛志